学苑・初等教育学科紀要　No. 848　91～113（2011・6）

〔資　　料〕

アメリカ初等教育演習（春季ボストン教育研修）の紹介とポートフォリオ調査による分析

木間英子・松本　淳・駒谷真美・爾　寛明・押谷由夫

Two-year Practice Report on the Boston Spring Educational Program

Eiko Konoma, Jun Matsumoto, Mami Komaya, Hiroaki Sono and Yoshio Oshitani

Abstract

The Boston Spring Educational Program was implemented by the Department of Elementary Education at Showa Women's University as the main part of its American Elementary Education Seminar in 2009.

The program provides students with experience and education beginning with pre-training in Tokyo, Japan followed by practice-training in Boston, USA. In the pre-training, students learn basic classroom English, how to make self-introductions, and English activities that can be used with children. In addition, they have opportunities to visit and practice at the British School in Tokyo. In the practice-training, the students observe classes, assist teachers and children, and engage in activities using English to the full extent of their abilities.

The results of a quantitative questionnaire survey in the first year, and qualitative portfolio research in the second year reveal the educational and cultural significance of the program. They showed that students were highly motivated and ready to communicate with and teach foreign children as a part of their pre-training. The practice-training allowed them to experience teaching American children. Their positive feedback about the activities in which they participated indicate that their confidence in their own ability increased. The program triggered in students new perspectives which they can use as a foundation for their own educational philosophy.

Key words: *Japan-U. S. comparative education（日米比較教育）, cross-cultural experience（異文化体験）, practice-teaching in nurseries, preschools, or elementary schools in Boston（ボストンの保育園，幼稚園，小学校での教育実習）*

四年制の初等教育学科を創設するとき，大きな柱として国際化に対応できる教員の養成を掲げた。その目玉の一つが，ボストン校での研修である。計画案を作成するに当たっては，ボストンに直接出向き，どのような研修が可能なのかをボストン校の先生方と一緒に検討させてもらった。

それが実際に動き出すまでには，段階を踏んだ。まずは，夏に全学生を対象に行われる「ボストン夏季研修」において，「初等教育プログラム」を組んでもらった。その中で，「アメリカ教育コース」と「初等教育コース」を設けて部分的に取り組むことになった。その成果を踏まえて，2009 年度から初等教育学科独自の「春季ボストン教育研修」が実現した。1 回目と 2 回目の実際の取り組みを紹介しながら，その効果とこれからの課題についても考察してみたいと思う。

（押谷由夫）

第１回春季ボストン教育研修

平成 22 年 2 月，15 人の学生が参加して，第 1 期の研修が行われた。初めの頃は，教室の中に自分の居場所をみつけるだけでも大変だった学生たちが，自分の置かれた状況を受け入れ，それをどうやって快適なものにしていけばいいのか，子どもたちと心を通い合わせるにはどうしたらいいのか，試行錯誤を繰り返しながら工夫を凝らした準備が毎日続いた。

学生たちは皆日に日に頼もしく逞しくなり，その成長ぶりは目を見張るものがあった。積極性や相手を思いやる気持ち，子どもたちと楽しい時を過ごしたいという自然にあふれ出てくる学生の思いは，ボストンの子どもたちや先生方に間違いなく十分に伝わったことと思う。

多くの方々の支援をいただいて，第 1 期の研修を無事終えることができたことを喜ぶとともに，さらに充実した研修に発展することを願ってやまない。

（引率者　木間英子）

ボストン研修の 2 週目では，午前中は，1 週目から継続して，小学校や幼稚園・保育園に通い，子どもたちの生活や授業の様子などを見学した。午後は，サイエンス・ミュージアム，チルドレン・ミュージアム等を見学して，子どもたちが学ぶための教材研究について学んだ。また，元教員によるアメリカ教育事情についての講義を受けた。そして，タフツ大学に行き，日本語を学ぶ学生と交流会を持った。

短期間に多くのプログラムを入れたことにより，過密スケジュールとなったが，学生は，大変楽しみ，また，宿題などもあったが，集中的にこなして，自由時間を確保し，ボストン市内に出かけ，アメリカ社会の見学や覚えたての単語を使うことなどプログラム外の活動も積極的に行った。

帰国前日には，アメリカを離れることへの寂しさを感じており，また，2 週間一緒に過ごしていた小学校，幼稚園，保育園の子どもたちに再会したいという思いを募らせていた。

（引率者　爾寛明）

1　研修の内容と取組

（1）　事前研修

研修回*	日時	（時間）	研修内容
第 1 回	12/8/2009	（2 時間）	事前テスト（TOEIC Bridge 模擬テスト） 事前アンケート
第 2 回	1/20/2010	（3 時間）	挨拶・自己紹介の方法・教室英語
第 3 回	2/6	（6 時間）	挨拶・自己紹介・教室英語の復習 Journal（研修記録）の書き方** Presentation の内容について検討*** Presentation のやり方（個人指導）
第 4 回	2/9	（1.5 時間）	Presentation の Rehearsal（個人指導）
第 5 回	2/10	（2.25 時間）	Presentation の Rehearsal（個人指導）
第 6 回	2/10	（4 時間）	Kerry Stevens 先生（昭和中学校・高等学校所属）による発音・文法の個人指導
第 7 回	2/11	（2.5 時間）	Presentation の Rehearsal（個人指導）

第 8 回	2/11	（2 時間）	British School（渋谷校・昭和校）Presentation
第 9 回	2/12	（4.5 時間）	Presentation の Follow-up・Activity の計画
第 10 回	2/15	（3.5 時間）	ボストン本研修の説明・Activity の枠組み検討
第 11 回	2/16	（1.5 時間）	ボストン本研修の説明・Activity の枠組み検討
第 12 回	2/17	（3 時間）	鈴木円先生（初等教育学科所属）による米国の歴史についての講義・爾先生による最終説明

＊上記以外に，国際協力室による渡航手続き等のガイダンスがあった。
＊＊参加学生には，Journal（研修記録）作成を課題として与えた。
＊＊＊Presentation は，日本の文化・行事・学生の特技などを 3 分程度で発表。Activity は，Presentation の内容を遊びに発展させたものや日本の遊び等，子どもたちと一緒に行う活動。

（2） ボストンでの本研修

研修日程*	研修内容
2/19	AM: ボストン到着
2/20	AM: オリエンテーション / PM: 市内観光
2/21	終日自由行動
2/22	AM: Opening Ceremony・Tufts University へ移動
	PM: Tufts 大学で森田先生と大学生たちと昼食・講義を聴講
2/23	AM: 研修校（小学校・幼稚園・保育園）で挨拶・自己紹介・観察実習**
	PM: 昭和 Boston にて研修
2/24	AM＋PM: 研修校（小幼保）で観察実習（一部参加実習）
2/25	AM: 研修校（小幼保）で観察実習（参加実習）/ PM: 昭和 Boston で研修
2/26	AM: 研修校（小幼保）で Presentation / PM: 昭和 Boston で研修
2/27-28	New York 観光（希望者のみ）
3/1	AM: 研修校（小幼保）での参加実習（Activity）
	PM: Educators' Workshop に参加・Museum of Science 見学
3/2	AM: 研修校（小幼保）で参加実習 / PM: Children's Museum 見学
3/3	AM: 昭和 Boston で Presentation / PM: 研修の総括
3/4	AM: Epiphany School の生徒と昼食・Activity / PM: 自由行動
3/5	AM: Closing Ceremony / PM: Tufts University にて大学生たちと送別会
3/6	AM: ボストン出発

＊昭和 Boston が作成した Early Education Program に基づく。
＊＊研修校では基本的に 1 クラスにつき学生 1 人が配属され，担任の先生の指導による研修。

（3） 事後研修

研修回*	日時	（時間）	研修内容
第 1 回	3/10/2010	（2.5 時間）	Welcome-back party・事後テスト・事後アンケート
第 2 回	3/11〜3/17	（各自）	研修レポート作成
第 3 回	3/29	（6 時間）	報告書作成・編集

＊参加学生は，2010 年 11 月に行われた秋桜祭で「アメリカ初等教育演習: ボストン春季教育研修」一期生として，研修を紹介した。

（駒谷真美）

2　ボストンでの研修風景

Tufts 大学のキャンパスで。
日本語を学ぶ大学生と一緒に講義にも出席した。

プレゼンテーションのために，日本からアンパンマンもはらぺこあおむしもディズニーベアも持参した。

「回転ずし」について，写真も見せながら，プレゼンテーションを行った。

硯に墨，本格的な習字を指導した。子どもたちは，自分の名前の漢字を教えてもらい，半紙に練習した。

子どもたちと一緒にオリガミレッスンを行った。

学長から修了証書が授与された。

（木間英子）

3　研修参加学生の感想

小学校研修

○　私が 6 日間配属された小学校は，公立だった。人種は様々で，中には着ている服が大き過ぎる子どももいた。子どもの前で有名なキャラクターについての Presentation と折り紙で犬を作る Activity を行った。担任の先生も支援してくださった。子どもの目はキラキラしていて好奇心が強く，興味を示して積極的に手を挙げたり「Wow!!」と反応したり喜んで参加してくれた。国境

を越えても意志と表現力があれば伝わるということを学んだ。

○　日本とアメリカの教育の違いについて，実際に体験し，驚いたことも多く，大変勉強になった。子どもたちと話したり，一緒に遊んだりする機会に恵まれ，生のアメリカ教育に触れることができた。また，日本の文化の一つである書道を子どもたちに紹介して，実際に文字を書くことを体験してもらった。子どもたちはとても興味を持ち実践してくれたので，私自身もボストンの教育現場で研修する励みになった。

○　私は3年生のクラスへ行ったのだが，子どもたちが学校生活を楽しんでおり自発的に学んでいることがとても心に残った。それが特によく見られたのはArtの授業である。Artでは日本の図工と同じように，絵を描いたり工作をしたり色を塗ったりという作業をするのだが，日本のように皆が同時に同じ作業をするのではなく，PaintingやDrawingなど5，6種類のブースに分かれており，それに見合った作業であれば何をしても良いのである。実際に私が見学した際も，粘土，色塗り，絵を描くなど様々な作業をしていた。

○　事前に英語の勉強をしておくこともちろん大切であると思うが，英語が話せないのならば，持ち物，髪型，服装など見ただけでも子どもが興味を持てる工夫を自分に施すことがコミュニケーションのきっかけとなることを体験を通して学んだ。また，今回の様に子どもの方から近寄ってきてくれないこと，上手く自分の気持ちを伝えられないことなどはこの先の実習などでも起こりうることであると思う。その様な通常とは違う状況になったときにも対処できる柔軟性を今後の大学生活で身につけていかなければならないと感じた。

幼稚園研修

○　アメリカの4歳児は学校で学んだり，昔遊んだりした日本の4歳児とほとんど変わりはなかった。周りの子と一緒に遊んでいるかと思えば，一人で違う遊びを始める子もいるし，周りが見えないくらい一つのことに集中している子もいる。遊び方は日本の子どもとそう変わらない。ただ，少し違うのは自分の意見や意思を明確にもっている子どもが多いことだ。日本の子どもは自分の感想や抽象的なイメージについてはよく話す子が多いが，アメリカの子どもは何か先生の見解や問いかけに対して発言できる子が多いと感じた。

○　幼稚園には，日本，中国，スペインなど様々な文化をもった子どもたちがいて，そのような環境でそれぞれの文化を尊重しつつ，園として一貫した教育を行っていくことの難しさを感じた。英語に自信がなく，コミュニケーションが取れるのか不安であったが，言葉がわからなくても子どもたちとは時間を追うごとに心が繋がっていくのを感じ，先生とも身振り手振りで一生懸命に伝え合い，言葉にならないながらもお互いに理解し合えたことが嬉しかった。

保育園研修

○　保育の中に子ども一人ひとりが主役になる場が設けられていた。私が訪れた保育園では，自分が持ってきた玩具をクラスの友達に紹介するという時間があった。数分だが人前に立って自分の思いを伝える訓練が行われているように感じられた。先生が子どもの自主性に任せて保育を行っているように感じられた。

○　プレゼンテーションも学校で先生方に指導をしていただき，事前研修で実際に子どもたちの前でやってみる機会を設けてくださったおかげで，本番では緊張しすぎず，やりきることができた。アクティビティでは，子どもたちと一緒におにぎりを作ったり，日本の歌を一緒に歌ったりした。

4　平成 21 年度　アンケート調査結果（摘要）

今回の春季ボストン教育研修は，初めての試みであったため，研修の成果と今後の発展への課題を検討する必要があった。よって，以下の手続きで，アンケート調査を実施した。紙幅の関係上詳細を述べることはできないため，一部を紹介する。

（1）　調査概要

①**調査目的**:「アメリカ初等教育演習　春季ボストン教育研修」に参加した学生の意識行動の全体的変化を把握し，研修の総合的な成果を検討する。

②**調査対象**: 上記研修に参加した初等教育学科の学生 15 人（1 年生 8 人+2 年生 7 人)。2 年生 1 人が事後アンケートに欠席したため，調査対象から除外し，14 人で分析した。

③**調査時期**: 事前アンケート　2009 年 12 月 8 日 / 事後アンケート　2010 年 3 月 10 日

④**調査手続き**: 渡米前の事前と帰国後の事後の 2 度に亘るアンケート調査を実施した。手続きとして，事前アンケートは大学の教室で，事後アンケートは持ち帰りにし，いずれも配布回収法で行った。事前アンケートの項目は，応募理由・研修前の期待や不安・英語経験・達成動機測定尺度・特性シャイネス尺度・自由記述等である。事後アンケートの項目は，研修全体の感想・心に残ったこと・よかったこと・つらかったこと・今後やってみたいこと・期待した結果・不安だったこと・達成動機測定尺度・特性シャイネス尺度・自由記述（事前研修・ボストン研修第 1 週目・ボストン研修第 2 週目・その他　生活など）である。

（2）　調査結果

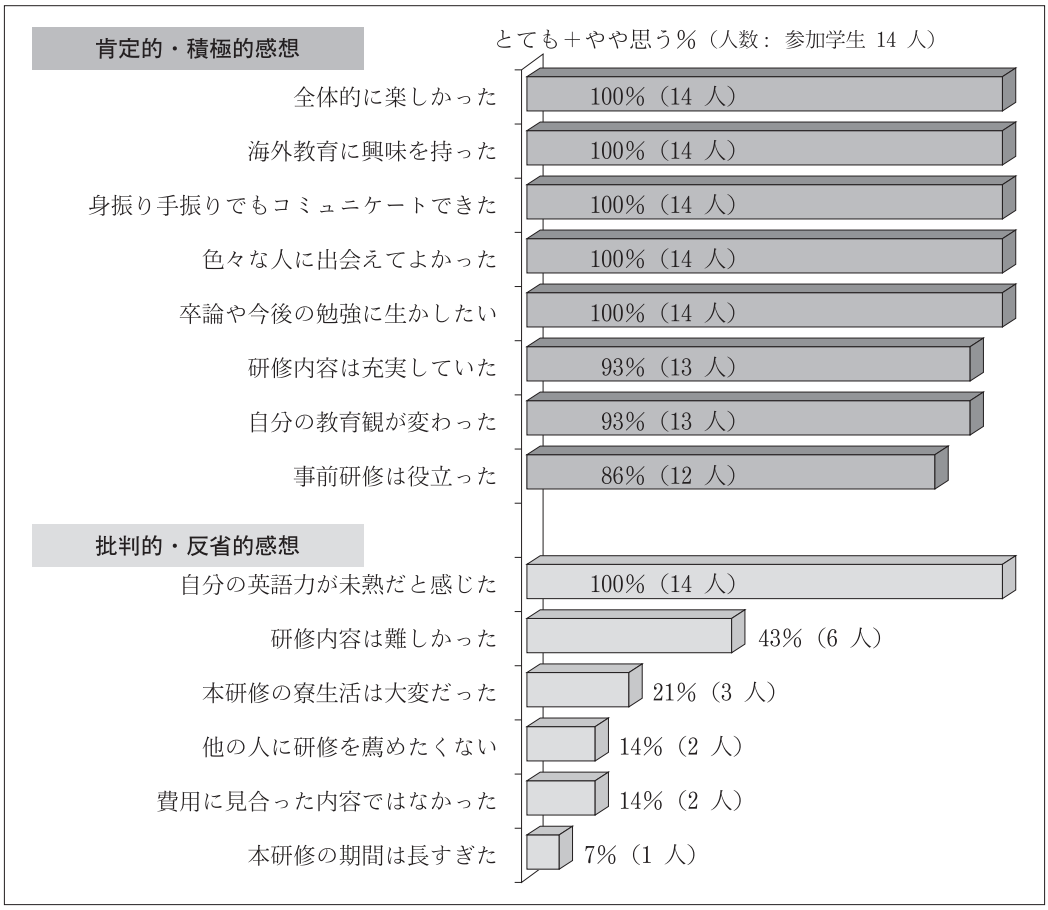
①事前アンケート結果のまとめ

学生が参加した主な動機は,「海外教育に対する興味」であり，今回の研修では,「米国での現場体験が出来ること」が決定要因になっていることもわかった。参加するにあたり，自身の語学力に不安を抱く一方，研修を楽しみにしている学生が多かった。また,「達成動機測定尺度」の結果，参加学生は，人には認められなくとも自分自身にとって価値のあることを成し遂げようとする「自己充実的達成動機」が高かった。つまり，参加学生は，様々なプレッシャーを感じつつも，自ら研修の意義を見出しやり遂げようとする意欲で臨んでいたことが示唆された。

②事後アンケート結果のまとめ

事前研修とボストンの本研修の感想を尋ねた結果，肯定的・積極的感想が，批判的・反省的感想より圧倒的に多かった（表 1 参照)。参加学生全員が研修を楽しみ，海外教育への関心を高めていた。自由記述にも書かれていたが，研修先の園校の子ども達や先生方に加えて，Tufts 大学の学生達や Special Education Class の子ども達，昭和ボストンのスタッフの方々と出会い，自らの語学力の限界を自覚しながらも，果敢にボディランゲージでコミュニケーションスキルを磨いていた。「事前研修で一所懸命頑張ったので，幼稚園で自信を持ってプレゼンできた」と回答した学生もおり，事前研修の必要性も認識されていた。子どもや教育に対する見方が変わった学生も多く，今回の研修が，参加学生の意識と行動に前向きな変化をもたらしたことがわかった。今回の研修は，初等教育学科の新たな可能性を問う試金石として意義があったと考える。

表１　春季ボストン教育研修に参加した学生の感想



③今後の課題

更なる発展のためには，研修プログラムの改善が望まれる。具体的には，本学科の学生は英語が主専攻でない以上，参加学生の英語レベルの個人差に配慮する・事前を含めて研修を中長期化し，英語に慣れる期間を増加する・学生の卒論や就職に繋がるような内容に配慮する等が，考えられる。

雛祭りについて，自作の“飛び出す絵本”で説明しました。

昭和ボストンのスタッフとカフェテリアで記念撮影をしました。

（文責: 駒谷真美）

第 2 回春季ボストン教育研修

アメリカの学校現場において，先生のアシスタントをしながら 1 日を子どもたちと過ごす，そんなプログラムを作りたいと思ったのは，2005 年にウィスコンシン州の学校群を訪問した時だった。それから多くの方々の協力を得て，2010 年 2 月に第 1 回春季ボストン研修が実施の運びとなった。英語力がある・ないにかかわらず，アメリカの教育現場に飛び込んでいく「チャレンジ精神」を養ってもらいたかった。実際，参加学生の英語力から「先生のアシスタント」をすることは難しかった。しかし，駒谷先生の事前研修の特訓のおかげで，学生たちは「ひな祭り」や「忍者」等，日本に関する事柄を紹介しながら子どもたちと交流するアクティビティを通して教室の中に溶け込んでいった。

2011 年 3 月に実施された第 2 回春季ボストン研修に引率者として同行し，現地の様子を知ることが出来た。学生たちは一人ひとりが異なる学校や保育園に行く。教室にはもちろん通訳してくれる人はいない。授業担当のパット先生と私が学校まで同行したのは初日だけである。次の日からは，昭和ボストンのバスで各自，学校や保育園に行き，定刻にバスを待って帰ってくる。物おじせずに，朝，淡々とバスに乗り込み，それぞれの学校へ出かけて行く姿に私は少し感動していた。「今，やるべきことをやる」そんな凛とした雰囲気が学生たちの中にあった。

「もっと長くいたかった」と学生たちは言う。2011 年は当初 3 月 12 日の出発予定であったが，3 月 11 日の東日本大震災により出発日が 3 月 16 日に延期になり，プログラムは 4 日減ってしまった。かわいそうではあったが，4 月 1 日からの新学期の日程を考えると仕方がなかった。第 2 回春季ボストン教育研修は，5 日間の学校参観実習であったが，今後，もっと長い期間参観実習をするプログラムも考えてもいいかもしれないと思った。

（引率者　松本淳）

1　研修の内容と取組

（1）　事前研修

研修回	日時	（時間）	研修内容
第 1 回	10/13/2010	（1.5 時間）	事前英語のレベルチェック（TOEIC Bridge）
第 2 回	11/12	（2.5 時間）	挨拶・歌の聴き取り・手遊び・Self-introduction の方法
第 3 回	11/17	（2.5 時間）	歌の聴き取り・手遊び・Self-introduction リハーサル
第 4 回	11/23	AM（2.5 時間）	Self-introduction の Native check（中高部 Kerry Stevens 先生） Video 録画＋リハーサル
		PM（5 時間）	British School 訪問＋Self-introduction 披露＋Video 録画 幼稚園: 渋谷校（駒谷引率）・小学校: 昭和校（松本引率） 訪問後，Video を見ながら大学にて振り返り
第 5 回	12/1	（0.5 時間）	Thank you letter＋Greeting card の書き方 → BST のお世話になった先生方＆Stevens 先生に送付
●冬休み中の課題			Activity の計画（日本語版）作成 （項目　①日本文化や遊び　②自分の特技の 2 種類 紹介する場合と一緒に遊ぶ場合の 2 パターン）
第 6 回	1/14/2011	（0.5 時間）	Activity 計画（日本語版）の内容チェック （活動の流れ・実施可能性検討）
●試験期間中の課題			Activity 計画から Storyboard（日本語版）作成

第 7 回	1/28	(0.5 時間)	Storyboard（日本語版）の内容チェック
第 8 回	2/16	(3 時間)	Storyboard（英語版）を作成
第 9 回	2/18	(3 時間)	Storyboard（英語版）の添削＋リハーサル
第 10 回	2/22	(3 時間)	Activity（incld. Storyboard）の Native check＋Video 録画
第 11 回	2/28	(3 時間)	Video を見ながら Review＋Improvement
第 12 回	3/4	(4 時間)	Activity の最終リハーサル
第 13 回	3/7	(5 時間)	British School 訪問＋Activity 披露＋Video 録画 訪問後，Video を見ながら大学にて振り返り
第 14 回	3/8	(1.5 時間)	Potluck party（壮行会）実施＋家庭訪問のマナー
第 15 回	3/8	(3 時間)	ボストン本研修の心得（爾）＋米国の歴史講義（鈴木）

（2） ボストンでの本研修

本研修	3/16-/28	3/11 の東日本大震災のため，3/12 の出発が 3/16 に変更 幼稚園・保育園・小学校研修＋Home visit → BST の先生方＆Stevens 先生に Postcard 郵送

（駒谷真美）

3/16　東京→ボストン
3/17　8:30　オープニング・セレモニー
　　9:00　授業
　　10:00-14:20　学校訪問（全ての学校）
3/18　7:30-14:20　学校訪問（ミッションヒル・スクール以外）
　　8:15-15:40　学校訪問（ミッションヒル・スクール）
3/19　New York トリップ
　　遊覧船で自由の女神を観る
　　ミュージカル「マンマ・ミーア」を観る
3/20　New York トリップ
　　トップ・オブ・ザ・ロック
3/21　7:30-11:30　学校訪問（ミッションヒル・スクール以外）
　　8:15-11:30　学校訪問（ミッションヒル・スクール）
　　午後: 科学博物館で研修を受ける
3/22　7:30-11:30　学校訪問（ミッションヒル・スクール以外）
　　8:15-11:30　学校訪問（ミッションヒル・スクール）
　　午後: 子ども博物館見学
3/23　7:30-14:20　学校訪問（ミッションヒル・スクール以外）
　　8:15-15:40　学校訪問（ミッションヒル・スクール）
3/24　9:00　授業
　　午後: Epiphany School 訪問・生徒と交流
3/25　9:00　まとめの授業
　　1:00　クロージング・セレモニー
　　午後: パット先生のお宅を訪問
3/26　午前: ハーバード大学訪問
　　午後: Free Time
3/27　ボストン→東京（東京着は 3 月 28 日）

（松本淳）

（3） 事後研修

●本研修後の課題　　4月　　Boston の研修先に Thank you Letter 作成・送付＋Portfolio 完成
　　5/11　　（1時間）　Welcome-back Party＋報告会実施

●Boston Spring Session の活動記録について　①毎回 Journal（「善き教師への道」記録用紙）執筆
②4/27 に Portfolio として提出（事後英語のレベルチェックの代替としても活用。本研修資料も添付）
③オープンキャンパスや秋桜祭などで 2010 年度の活動発表予定

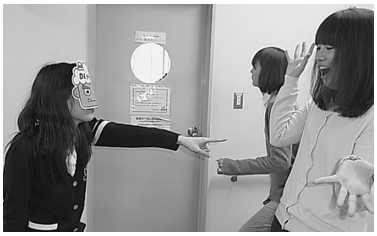
（駒谷真美）

2　研修の風景

事前研修

ブリティッシュスクールでの事前研修

2010 年 11 月と 2011 年 3 月にブリティッシュスクール渋谷校と同昭和校にて，
プレゼンテーションの練習をさせていただきました。



アクティビティの練習:「だるまさんが転んだ」の遊びをどうやったら，アメリカの子どもたちにうまく説明出来るか，試行錯誤を繰り返しました。

2011 年 3 月 16 日から 28 日までの「第 2 回春季ボストン教育研修」の記録

オープニング・セレモニー: 3 月 12 日から開始される予定だったボストン教育研修は 4 日遅れて，3 月 16 日に出発。3 月 17 日のオープニング・セレモニーでは，ボストン校のプロボ学長からお話をいただきました。

実習校: 3 月 17 日から早速，学校参観実習が開始されました。一人ひとりが別々の学校に配属されました。写真は，実習校の一つ，John R. Pierce School

NY トリップ（3 月 19 日－20 日）:
週末は NY トリップを楽しみました。
ロックフェラーセンターの展望台から。

3 月 21 日　ボストン科学博物館を
訪問し，研修を受けました。

3 月 23 日　ミッションヒル・スクールで
の朝の会

実習校で「ひな祭り」の作品を子どもたちと一緒に
作りました。

実習校でのアクティビティを授業で報告（3 月 24 日）

「だるまさんが転んだ」の遊びを説明

「私の 1 日」を説明

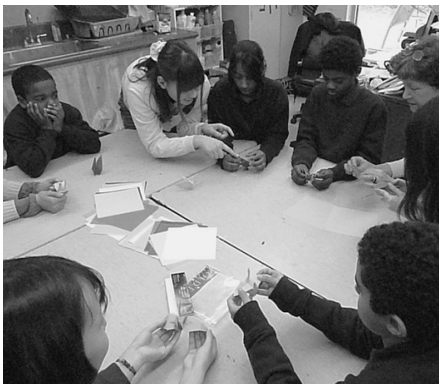
「ひな祭り」を説明

昭和ボストンでの授業風景

パット先生の授業

「忍者」について説明

Epiphany School での交流授業（3 月 24 日）



修了式

短かかったけれど，充実した研修でした。

（松本淳）

3　平成 22 年度　ポートフォリオ調査結果（摘要）

平成 22 年度の春季ボストン教育研修は，前年度からの継続実施であるが，若干異なる点がある。それは，前期の早い時期に募集を開始し参加者が確定できたため，後期全体に亘り事前研修全 15 回（事後研修を含有する場合は全 16 回）を実施でき，ボストンの本研修に臨めた点である。この特徴を踏まえ，本年度は，参加学生の学びの詳細を把握するために，以下の手続きでポートフォリオ（portfolio）調査を実施した。紙幅の関係上，一部を掲載する。

（1）　調査概要

①**調査目的**:「米国初等教育演習　春季ボストン教育研修」に参加した学生について，日本での事前研修からボストンでの本研修を経て帰国するまでの長期的かつ継続的な学びの変化を把握する。今年度の研修内容から総合的な成果を検討する。

②**調査対象**: 上記の研修に参加した初等教育学科の学生 7 人（1 年生 4 人＋2 年生 3 人）

③**調査時期**: 2010 年 10 月 13 日～2011 年 4 月 27 日（事前事後研修スケジュールを参照）

④**調査手続き**: 全参加学生は，日本での事前研修とボストンでの本研修の期間中，初等教育学科制作の記録ファイル「善き教師への道」にある「諸活動の記録」用紙を利用し，journal として研修が

実施された回ごとに「目的」「学んだこと」を具体的に記述した。帰国後に，日々の journal に加えて事前研修の配布資料・自己紹介と活動案のワークシート・本研修で収集した資料・制作した教材・写真などをまとめて portfolio として提出した。

（2） 調査結果

日本の事前研修からボストンの本研修まで時系列に沿って，参加学生の portfolio の記述から主たる学びの変化をまとめカテゴライズ（＊）した結果を述べる。

①事前研修（前半: 第1回〜5回）

＊自分の英語の実力を知り，これからの研修に対し高まる状況必然性

第1回に英語のレベルチェック（TOEIC Bridge）を7人の参加学生に実施した。TOEIC score に換算した range は，285-577（英検3級〜2級程度）と判明した。レベルチェックを受けた学生は，「現在の自分の英語のレベルを知ることができた。文法では点数を取れたが，リスニングがあまり良い成績ではなく苦手だと気づいた。出発前に課題を再認識できた（1年）」と記述していた。初等教育学科は，英語は主専攻ではなく苦手意識を持つ学生が少なくないが，このレベルチェックにより，参加学生は，自分の現段階の英語力を認識した結果，状況的要求に応じる形で，英語を学ぶ必然性（状況必然性）を感じ取っていた（鹿毛，1995）。

＊「英語耳」へのレディネス形成に向けて，戸惑いと楽しさを実感

第2回からは，導入として，挨拶や日常会話の練習を始めとして，歌の聴き取り（ex. Top of the World）や手遊び（ex. Bingo）を実施した。当初は「ほとんど聞き取れなかった（1年）」「英語で歌いながら振り付けするのは，とても難しかった（1年）」と戸惑いを見せる学生もいたが，「耳が英語に少し慣れてきた（1年）」「音楽を通して英語を学ぶのはとても楽しかった（1年）」と徐々に英語との距離を縮めていった。

＊認知的段階の表現（a）: 自己紹介を「母国語（日本語）」で検討し，「伝えたい」内容を吟味

事前研修前半の中心活動は self-introduction である。この時期の1・2年生は，教育実習や保育実習をまだ体験しておらず，実習の一環として実施される自己紹介の経験がないため，最初の段階として，日本語で紹介したい内容を検討し，次に英語に言い換える作業を行った。母国語による表現をまず頭で理解する段階（認知的段階）である（鹿毛，1997）。学生の記述には，「自分の好きなものや趣味について，どのように紹介したらよりインパクトがあるか。子どもたちの心に残るようなものにしたい（1年）」「いかに自分のことを伝えることができるか，いかに子どもたちの心を摑むか，内容についてよく考えたい（2年）」とあり，日本語，英語にかかわらず，自己紹介の意義について理解を示し始めていた。

＊認知的段階の表現（b）: 自己紹介を初めて「英語」で挑戦し，独自の表現方法に暗中模索

続けて，同じ認知的段階ではあるが，英語の draft を作成しリハーサルする中盤の段階になる。「英語を読むだけでも大変だが，用意した小道具（materials）を出すときのタイミング，また出すときの効果音にも工夫することが大事だとわかった。少し恥ずかしいので，英語を淡々と話してしまいがちだが，アクセントや抑揚，手振り身振りがとても重要だと感じた。元気よく笑顔で自信満々に話せるように練習を重ねたい（1年）」という記述が見られた。自分の英語力の壁と対峙しながらも自己表現の方法を模索する様子がうかがわれた。

＊体制化の段階の表現（a）: native speaker の指導で「生き生きした」英語の自己紹介へ変換

一通りリハーサルを終えた段階で，昭和女子大学附属中高部所属の Kerry Stevens 先生に native check を依頼した。英語での表現をひとつのまとまりとして捉える段階（体制化の段階）である（鹿毛, 1997）。参加学生は Stevens 先生の前で self-introduction（5 分程度。self-introduction の項目は「表 2 参加学生の自己紹介と活動の内容一覧」を参照）を発表し，feedback をもらった。「緊張して覚えていたものが飛んでしまった。仕方なく紙を見ながらの発表になってしまい情けなかった。英語で話した経験がないので，私の英語がちゃんと通じているのか不安になり，英語で話しコミュニケーションを取ることの難しさを学んだ。British School Tokyo（渋谷と昭和女子大学構内にあるインターナショナルスクール。以下「BST」と略す）での発表が不安であるが，とりあえず笑顔で楽しい気持ちを伝えられるようにしたい（2 年）」「文法上はきちんとした英文になっていても，自分の発音次第で異なる意味を与えてしまうことがわかった。また同じ意味の単語でもニュアンスが異なり，吟味しなければ上手く伝わらないこともわかった。Review を行い，改善することが大切だ（2 年）」「発音や区切り方を身につけることができた（1 年）」と，学生の記述にあるように，native の先生の前で初めて発表したことで，実際に英語で“伝える”ことの難しさに直面し，それには表現方法に工夫が必要であると感じ取っていた。

表 2　参加学生の自己紹介と活動の内容一覧

Student List of Boston Spring Session in March 2011（Department of Elementary Education）

参加学生（調査用に名前省略）	Desired school and age group（実習希望先/希望年齢）	Content of self-introduction in addition to providing basic information, about 3-5 minutes（自己紹介の内容）	Content of Activities, about 15-30 minutes and more（活動の内容）
1 年生	Preschool, 5-year-olds（幼稚園・5 歳児）	My pet, a Japanese dog, named Colon（ペットの柴犬「コロン」について）	1. Briefly explain about “Sumo,” the Japanese-style wrestling. 2. Demonstrate how to **play the “Paper Sumo” game**. 3. Decorate a “Paper Sumo wrestler” individually. 4. Play the “Paper Sumo” game in groups.（「相撲」を紹介し，「紙相撲」の力士の型紙に色を塗り，グループで「紙相撲」をして遊ぶ）
1 年生	Preschool, 5-year-olds（幼稚園・5 歳児）	My favorite character, Hello Kitty（キティちゃんグッズについて）	1. Briefly explain and demonstrate how to **play “Daruma-san ga koronda,” the Japanese traditional popular game** such as “What’s the time, Mr. Wolf?” 2. Play “Daruma-san ga koronda” in class.（日本の伝統的な遊び「だるまさんがころんだ」を紹介し一緒に遊ぶ）
1 年生	Preschool or elementary school, 5-year-olds to 3rd graders（幼稚園・5 歳児～小学校・3 年生）	I love music! I can play the recorder!（音楽大好き！ リコーダー演奏を少々披露）	1. Briefly explain about “Hinamatsuri,” the traditional Japanese festival. 2. Demonstrate how to **make “Hina-dolls” with Origami**. 3. Decorate “Hina-dolls” individually. 4. Show-and-tell “Hina-dolls” in class.（日本の伝統行事「雛祭り」を紹介し，折り紙で雛人形を作り顔や着物に色を塗り一緒に遊ぶ）
1 年生	Preschool or nursery, 3 to 5-year-olds（幼稚園か保育園・3～5 歳児）	The origin of my pet’s name, Johnny（ペットの「ジョニー」の名前の由来について）	1. Briefly explain and play trivia about “Sushi,” the traditional Japanese food. 2. Demonstrate how to **make “Sushi” plates**. 3. Make “Sushi” plates individually. 4. Play “Sushi Restaurant” game in group.（「寿司」についてクイズで紹介し，寿司プレートを一緒に作って遊ぶ）
2 年生	Elementary school, 3rd-4th graders（小学校・中学年）	My special family member（家族の一員のスペシャルな犬について）	1. Briefly explain about “Ninja,” the old Japanese secret agents. 2. Demonstrate how to make and play the Origami “Shuriken,” the Ninja’s weapon. 3. Decorate “Shuriken” individually. 4. **Play the “Ninja” game with “Shuriken”** in class.（「忍者」を紹介し，折り紙の手裏剣に色を塗り，「忍者ゲーム」で一緒に遊ぶ）
2 年生	Elementary school, 3rd-6th graders（小学校・中高学年）	My pet cat named Sakura（ペットの猫「桜」について）	1. Introduce **“My Japanese-style daily life”** showing the pictures. 2. Write or draw the happiest thing in children’s daily lives individually. 3. Tell “My enjoyable daily life” in class.（自分の日本的日常生活を紹介し，子どもたちに自分の生活で楽しいことを絵や文章で表現してもらう）
2 年生	Elementary school, 3rd-4th graders（小学校・中学年）	I love Minnie Mouse!（大好きなミニーマウスについて）	1. Explain about **Japanese-style St. Valentine’s Day and “White Day,” the unique Japanese custom.** 2. Make a plan of “White Day” individually. 3. Show-and-tell the plans of “White Day” in class.（日本ならではのバレンタインデーとホワイトデーについて紹介し，ホワイトデーのプランを作って皆で発表する）

PREPARED by Mami KOMAYA

＊自動化の段階の表現（a）: 英語の自己紹介を BST の子どもたちに初めて披露し芽生えた自信

Self-introduction の最終段階は，BST の子どもたちの前での発表であった。この時期の参加学生は，self-introduction の反復練習による動作や言葉が高度に体制化され，自動的な流れに至る段階（自動化の段階）へ移行中である（鹿毛，1997）。参加学生の希望により，ボストンで幼稚園・保育園での研修を希望する学生は BST 渋谷校，小学校を希望する学生は BST 昭和校を訪問した。「すごく不安で声がうわずってしまったが，子どもたちが猫の写真を見て笑い，自己紹介の後に色々話しかけてくれたので嬉しかった。私の英語は一応通じることがわかったので，後は自信が必要だと思った（2 年）」「自己紹介で笑ってもらえるか，くいついてもらえるかという不安が，実際に子どもたちの前でやってみて，安心に変わった。中学年の子どもたちには受け入れてもらえたので，自信を持って練習を重ねていきたい（2 年）」「ペットの紹介をすると，『私も犬を飼っているよ』『（紹介した犬の名前が）僕のお父さんと同じ』などと，子どもたちが色々な反応を示してくれた（1 年）」「自分の大好きな Kitty のぬいぐるみを見せると，子どもたちが大きな声で『Kitty! Kitty!』と楽しそうに応え，『私も Kitty goods 持っている』と言い，話題が広がった（1 年）」。緊張で始まった self-introduction が，子どもたちから好感触を得られたことが，参加学生の達成感につながり，同時に英語に対する恐怖感や劣等感が薄れていき，コミュニケーション自体を楽しもうという姿勢が培われ始めていた。

②事前研修（後半: 冬期休暇～第 15 回）

＊認知的段階の表現（c）: 活動の基礎基本を母国語（日本語）で学習し，活動計画を試行錯誤の中で「教える」感覚を把握

事前研修後半の中心活動は，activity である。これは，実習先のボストンの幼稚園や小学校で，参加実習として実際に子どもたちと一緒に行う活動（15 分～30 分程度）を指す（学生の活動内容は「表 2 参加学生の自己紹介と活動の内容一覧」を参照）。前述の self-introduction と同様に，指導案を作成した経験がない学年のため，最初の段階として，activity plan（日本語 version）の作成から取りかかった。self-introduction と異なり，activity は，日本の遊びや文化風習の単なる紹介に留まらず，子どもたちと時間や場を共有することで，教育的・発達的観点も求められる。活動計画自体の理解が根本となり，認知的段階の表現方法が検討された。

以下の学生の記述からも試行錯誤の過程を垣間見ることができる。「子どもたちが楽しく安全に活動するには，活動計画（活動名・ねらい・準備/環境構成・遊び方/プロセス・援助のポイント・発展活動）の項目や起承転結を根本的に考えることが重要だとわかった。難しかった（1 年）」「七五三や折り紙など色々考えた activity の案から『紙相撲』を選んだ。最初に相撲の写真を見せながら相撲について説明し，続いて紙相撲の遊び方を紹介し，最後に子どもたちが折り紙で力士を作って遊ぶという流れを考えた。しかし，『米国の園児は，折り紙の力士を形通りハサミで切って力士人形を作成する作業は難しい』と駒谷先生に指摘され，力士の型紙までは私があらかじめ作り，子どもたちは力士の型紙に絵だけを描くことにした。ボストンの子どもたちが楽しんでくれるような工夫は欠かせないと思った（1 年）」「activity の案として，けん玉・日本文化の紹介・だるまさんが転んだ・あやとり・折り紙を考えた。これらの中から『だるまさんが転んだ』を選択した。理由は，子どもたちと一緒に遊べるからである。受け身で話を聞くのではなく，積極的に遊ぶことができる（1 年）」。活動計画を立てることが，子どもたちに教えることや一緒に遊び学ぶことの重要性を学ぶ契機になっていった。

＊体制化の段階の表現（b）：活動の流れを企画コンテで視覚化して日本語で把握

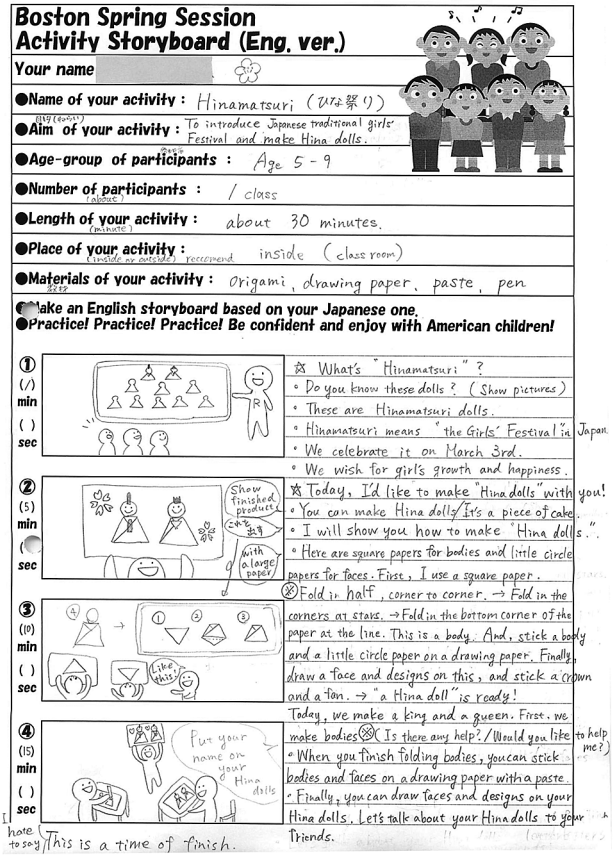
次の段階として，activity plan を元にした storyboard（企画コンテ・日本語 version）の作成に移行した。企画コンテの特性が，活動の流れを捉えるものであるので，ここでは体制化の段階の表現が求められた。「自分の storyboard を皆で見せ合い，テーマが似ている活動は，長所を取り入れて一つの活動にまとめた。その結果，一人で作成した storyboard よりも具体的でわかりやすいものができた。どの activity を選んでも楽しそうだと思える storyboard が完成して良かった（1 年）」「自分の storyboard で説明が硬いところ，わかりにくいところが，発表して話し合いでわかった。改良して完成させたい（2 年）」。このように，各自で作成した storyboard を発表し，学生全員でグループ討論をするなかで，参加学生は改善策の手がかりを摑んでいた。

＊体制化の段階の表現（c）：Storyboard を通して「英語で教える」活動の重要性を自覚

Storyboard の日本語 version で大まかな activity のイメージと流れを把握してから，英語 version の作成を実施し，表現段階では，英語での体制化の段階に入る（資料 1 参照）。各自で用意した資料を持ち寄り，参加学生で協力して activity ごとに作成していった。self-introduction で「伝えたい」ことを日本語から英語へ変える過程は理解していたが，activity は更に「教える」「共に遊び学ぶ」過程が必要とされ，その作業は困難を極めた。「自分なりに文章を考え絵も描いたが，日本語版を英訳しそのまま使用するより，英語版として楽しくわかりやすい文章にした方が良いことがわかった。内容は同じだが文章を変えることで，自分自身が話しやすくなり楽しんでできそうだ（1 年）」「わかりやすく説明する準備をした。『だるまさんが転んだ』は，些細なことでも説明しなくてはならない。タッチするとアウトになることや捕まった子どもたちは（数珠つなぎに）手を握るなど，日本ではやり方を知らなくても見ていれば覚えられる遊びのルールが，ボストンの子どもたちには，全て初めての体験となる。正直言葉の違いを甘く考えていた。英語で文章を考えるのはとても苦しかった（1 年）」「各自での作業だったが，activity の内容が似ている者同士で協力し合ったり，以前調べた資料を交換したりして，効率よく作成できた。全てを一人でやるのは大変だが，協力し合うことでとても助けられた（1 年）」。storyboard では，日本語 version で activity の枠組みを把握していたにもかかわらず，どの学生も“英語で教える”工夫に悪戦苦闘した。しかし，参加学生がチームとして協力する体制が徐々に確立し，学生自身の支えになっていったことが，英語 version の完成を促進した。

＊自動化の段階の表現（b）：native speaker によるより具体的かつ自然な表現を体験

Storyboard を元に activity のリハーサルを重ねる時期に該当するので，自動化の段階の表現が期待された。再度中高部の Kerry Stevens 先生の native check を受けた。「前回の自己紹介の時よりもあまり緊張せず，少し度胸がついた。文法だけでなく，台詞の言い回しもアドバイス頂き，よりわかりやすい activity になった。原稿をしっかり暗記して，自信を持ってプレゼンできるようにしたい（1 年）」「小さい動きでは子どもたちに伝わらない。子どもたちにはわかりやすく簡単な単語を使う。実際に子どもたちにやって見せる。『だるまさんが転んだ』は，やりやすく英語で説明できると思っていた。しかし，ボストンの子どもたちには，“初めの一歩”から説明しなければならず，どうすれば簡単に教えられるか悩んだ（1 年・後日個人リハーサルで，説明補充として鬼のお面や紙芝居を発案し作成）」。Stevens 先生から activity として成立する英語表現を具体的に教わり，feedback を自分たちなりに消化しようとする姿勢が見られた。



Boston Spring Session
Activity Storyboard (Eng. ver.)

Your name [redacted]

●Name of your activity : Hinamatsuri (ひな祭り)

●Aim of your activity : To introduce Japanese traditional girls' Festival and make Hina dolls.

●Age-group of participants : Age 5 - 9

●Number of participants : 1 class

●Length of your activity : about 30 minutes.

●Place of your activity : inside (class room)

●Materials of your activity : origami, drawing paper, paste, pen

●Make an English storyboard based on your Japanese one.
●Practice! Practice! Practice! Be confident and enjoy with American children!

① (/) min ( ) sec

☆ What's "Hinamatsuri"?
・Do you know these dolls? (Show pictures)
・These are Hinamatsuri dolls.
・Hinamatsuri means "the Girls' Festival" in Japan.
・We celebrate it on March 3rd.
・We wish for girl's growth and happiness.

② (5) min ( ) sec

☆ Today, I'd like to make "Hina dolls" with you!
・You can make Hina dolls. It's a piece of cake.
・I will show you how to make "Hina dolls.".
・Here are square papers for bodies and little circle papers for faces. First, I use a square paper.
※ Fold in half, corner to corner. → Fold in the corners at stars. → Fold in the bottom corner of the paper at the line. This is a body. And, stick a body and a little circle paper on a drawing paper. Finally, draw a face and designs on this, and stick a crown and a fan. → "a Hina doll" is ready!

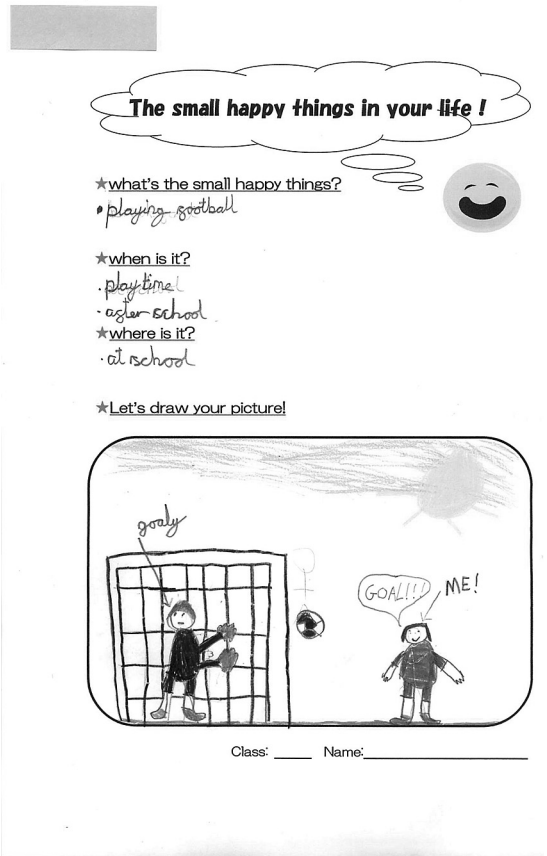
③ (10) min ( ) sec

Today, we make a king and a queen. First, we make bodies ※ (Is there any help? / Would you like to help me?)
・When you finish folding bodies, you can stick bodies and faces on a drawing paper with a paste.
・Finally, you can draw faces and designs on your Hina dolls. Let's talk about your Hina dolls to your friends.

④ (15) min ( ) sec

I hate to say / This is a time of finish.

資料 1: Storyboard（英語 version　学生記入例）



The small happy things in your life!

★what's the small happy things?
・playing football

★when is it?
・playtime
・after school

★where is it?
・at school

★Let's draw your picture!

goaly
GOAL!!!
ME!

Class: ____ Name: _____

資料 2: Worksheet（BST の小学生記入例）

＊自動化の段階の表現（c）: BST で初めての活動が成功し，高まる自己必然性

Activity の反復練習を深化した結果，自動化の段階として完成度の高い表現が期待された。前回と同様に BST 渋谷校と昭和校を訪問し実施した。今回は実際に子どもたちと一緒に活動する最初の体験であった。「緊張して子どもたちが受け入れてくれるかとても心配だった。しかし実際には子どもたちは『だるまさんが転んだ』を知っていて，鬼のお面を見てとても喜んだ。言葉を超えて“楽しいことは伝わる”と感じた（1 年）」「子どもたちは相撲の写真に反応し，紙相撲も楽しく作っていた。子どもたちが笑顔でいてくれたので，私も自然と楽しく activity ができた。紙相撲の試合をしてみて初めて，“指先でトントンと土俵を叩いて遊ぶ”ことを教えなければならないとわかった。試合の終了時間になり声をかけようとしたが，緊張して声をかけることができなかった。子どもたちの前では明るく楽しく接することも大切だが，自信を持って行動すべきだと学んだ（1 年）」「5・6 歳のクラスで『寿司プレート』の活動をした。子どもたちは日本に住んでいることもあり，寿司のことをよく知っていた。寿司の説明も真剣に聞き，寿司ネタのクイズでは積極的に参加していた。実際に自分の寿司プレートを作る場面では，楽しんで活動に取り組んでいて，アルファベットや平仮名の書き方を習い始めたこともあってか，寿司のネタの名前を書くという活動に発展した。（ネタを）選んで貼るというのは，やや簡単な活動だったので，ボストンでは自分で好きなネタを描く活動も追加したい（1 年）」「前回はかなり緊張したが，今回は練習したことができた。日本の伝統的な家を紹介して，子どもたちは自分が思う“the small happy thing”を書いた（資料 2 参照）。自分の activity を発表した後に担任の先生が私のワークシートについて詳しく説明していたので，私の activity の説明だけ

では足りないと気づいた。ボストンでもっとスムーズにできるように準備したい（2年）」。

BSTでのactivityは，実際に子どもたちに遊び方を教えて一緒に遊ぶことができたことで，前回より達成度は高まった。加えて，学生たちは，自分のactivityの説明でどの部分を補充したらよいか，冷静に自分で課題を見つけ検討するようになっていた。このactivityの実践終了後には，むやみに不安がる言動は減少し，確実にボストンの本研修に対する期待と自分にとって必要だから積極的に学ぶ（自己必然性）の姿勢が表出してきた（鹿毛，1995）。

③本研修（前半: 渡米から参観実習まで）

本研修は，平成23年3月11日に起きた東日本大震災の影響で，当初12日に予定されていた出発が一旦延期された。東北地方を襲った地震と津波の天災に加えて，福島第一原発事故という未曽有の事態に日本国中が恐怖と不安に包まれた。Showa Bostonとやり取りの結果，ボストン研修に支障はないと判断し，4日遅れの16日，参加学生はボストンに向けて出発した。「Showa Bostonでは学長をはじめResident Assistant（寮のスタッフ）の方々が歓迎して下さった。地震が起きた時は気持ちが落ち込み，このままボストンに行ってよいのか不安になったが，来てよかった（1年）」。参加学生の複雑な気持ちをボストン側のスタッフが温かく受け止めてくれ，ボストンの研修が開始した。

事前に学生の実習希望先と希望年齢を伝えていたので（表2参照），参加学生は，nursery/preschool/elementary schoolにそれぞれ配属された。本研修は，前半はobservation（観察実習。self-introductionも含む），後半はactivity（参加実習）を中心に実施された。校外学習として，museum見学や他の小学校訪問も組み込まれていた。

＊自動化の段階の表現（d）: 本研修におけるself-introductionの肯定的反応

Self-introductionは既に事前研修が終了し，自動化の段階において表現の定着が見られた。本研修での自己紹介は概ねスムーズな出だしであったことが，以下の記述からわかる。「愛犬コロンについて紹介した。コロンの写真を見せた時，“Oh!”とほとんどの子どもたちが反応し，問いかけにも手を挙げて答えていた。担任の先生が私の言ったことに説明を加えてくれていたので，実際は子どもたちにはどこまで伝わっているのかと思った。Activityの時はゆっくりはっきり話そうと思った（1年・preschool）」「自己紹介は練習の通りできた。自己紹介の後に“私も猫を2匹飼っているの”と話した女の子もいた。ただ子どもたちが早口で話すので，内容は全然わからなかった（2年・elementary school）」。今後子どもたちとコミュニケーションが取れるのか，不安を抱きつつも第一段階のself-introductionをクリアしたことで，子どもたちに自分のことを知ってもらえたという安心感から学生は積極的な参加へ弾みがついた。

＊observationによる気づき（a）: 環境構成における物理的差異

参観実習の機会に恵まれ，参加学生全員が初めて米国の保育園・幼稚園・小学校を訪問した。学生の目に一番に留まったのは，保育室や教室の色彩・配置であり，驚いた気持ちを記していた。「部屋中カラフルな配色だった。布団は紫，画用紙はピンクだった（1年・nursery）」「机が並んで配置されておらず，丸テーブルに数個の椅子が置かれていた。絨毯が敷いてあるスペースで朝の集会があった。教室に皿とコップがあり，おやつの時間が設定されていた（1年・preschool）」「教室には机と椅子が設置されたスペースとmeetingスペースがあり，算数の時間でもmeetingスペースで行っていた（2年・elementary school）」「算数の時間で床にサークルになって座って授業をしていた。先生と子ども

たち一人ひとりの距離が近かった（1年・preschool）」。

＊observationによる気づき（b）：指導法や保育・授業形態に文化的差異

参観実習が進むにつれ，参加学生は，圧倒的に日米の文化的相違点に着目していった。日本の教師と異なり，米国の教師がかなりカジュアルなスタイルで保育や授業を行っていることに，カルチャーショックを受けていた。「先生が机の上に座って子どもたちと接していたので，驚いた（1年・nursery）」「クラスには必ず2・3人の先生が配属され，様々な子どもたちを同時に教えていた（2年・elementary school）」「保護者が定期的に童話の読み聞かせなどをする時間があり，地域交流の時間や場が設けられていた（2年・elementary school）」「授業と授業の間の休み時間が設定されておらず，子どもたちはお手洗いや水飲みに，（紙に記入して）好きな時に行くことができる（2年・elementary school）」「毎朝，色々な国の言葉で挨拶をする（2年・elementary school）」「理科の授業では，決まった教科書がなく，単元ごと（例えばミミズや環境など）に参考書やプリントが配られた。先生が板書して教えるのではなく，子どもたちが読み，考え，答えを導くスタイルで，子どもの自主性や自立性を尊重していた。配布した資料からどのようなことがわかるか，気づくかを子どもたちで発表し合い，子ども主体で授業が進んでいた（2年・elementary school）」「算数の時間で，平行について先生が一通り説明をしたら，子どもたちが自分で問題を解いていた。担任・アシスタントティーチャー・実習生の3人で指導し，理解を確認していた。子どもたちは，自分が問題を解いたら，他の事（読書やパズル）などを静かにしていた。複数の先生がいるので常に緊張感がある一方，問題を解決したら自分の好きなことができるので集中して真面目に取り組んでいて，授業にメリハリがあった（2年・elementary school）」「音楽の時間，日本ではピアノ伴奏が多いが，ここではギター伴奏で子どもたちと一緒に歌っていた（1年・preschool）」「Buddiesという授業で，高学年の児童が低学年の児童と組み，自分が調べた内容を教えていた。異年齢の関係を大切にし，教える体験ができていた（2年・elementary school）」「授業中騒いでいた児童がいた。先生が注意しても収まらなかったので，補助の先生が教室の外へ連れて行った。これは“他の子どもたちの学ぶ権利”を侵害しないための措置だと知った（2年・elementary school）」。

続いて，日米の類似点について学生は，「月曜日，登校してきた児童から“Weekend News”を書いていた。文字を書ける児童とまだ書けない児童がいるが，書けない児童は先生に説明して文を書いていた。自分も低学年の頃，週末の出来事を絵日記に書いたことがあったので，日本と同じだと思った。自分たちで育てた植物でサラダを作っていて，それも日本も同じだと思った。皆で育てたものをとても楽しそうに料理していた（1年・preschool）」と記述していた。

＊ピンチをチャンスに変える自己効力感の芽生え

参加学生の中には鹿毛（1997）の自己効力感の研究で明らかにされた，自分の危機的状況を冷静に捉え，自らの手で何らかの働きかけができると信じ行動に移すパターンが見られた。例えば，本研修の前半に，アクシデントに見舞われるケースがあった。「実習先のpreschoolに行ったら休みだったため，急遽nurseryを訪問することになった。到着した頃には午睡の時間で，寝付けない子どもたちの傍らで頭をなでて休ませるという，幼小コースの自分にとって滅多にできない経験をした。nurseryに行けたのはある意味ラッキーだった（1年）」と前向きに捉えることができていた。また，実際にnurseryで子どもたちと出会ってから，問題に直面する場合もあった。「（初日）子どもたちは私に関心を示してくれなかった。話しかけたが，どこかへ行ってしまう子どももいたため，どのよう

に接すればよいか分からなくなった。明日は折り紙を持って行くことにした。（翌日）朝30分位，数人の子どもたちと一緒に折り紙で遊んだ。最初は一人に教えていたのだが，その様子を見ていた他の子どもたちが“何をしているの”という表情で集まってきた。猫・花・パックンチョ・飛行機などを作った。（翌々日）朝から折り紙で遊んだ。パックンチョが大人気で子どもたちに“折ってくれ”とせがまれた。折り紙を通して子どもたちと仲良くなれた（1年・nursery）」。もう少し自分が工夫すれば，もっと子どもたちと仲良くできるはずと，子どもたちとの交流のきっかけを自ら作り出していくバイタリティーも出てきた。

④本研修（後半: 博物館見学から参加実習・他校訪問）

＊校外学習（a）: museum 見学でも文化的差異

米国では多種多様な博物館があり，子どもたちに学校とは異なる遊びや学びの場を提供している。参加学生は，本研修の一環として2種類の博物館を見学した。Museum of Science では，「科学者の視点で実際に見て触れて考えて学ぶ4段階で体験できるので，米国の子どもたちが理科を好きになると思った（2年）」「ワークショップに参加した。最初に“銀色のくねくねした固まり”を見て，皆で何かを話し合った。その間スタッフの方はじっと子どもたちが答えを出すのを待っていた。そして“蟻の巣”だと解答し，考える過程が大切だと教わった。梃子の原理や浮力など実際に体を使って調べるので，楽しく印象に残る学習になると思った（1年）」。

Children's Museum では，0歳児から気軽に学べるコンセプトで様々なブースが設定されている。例えば，「工事現場やスーパーなど仕事体験できるブースでは，子どもたちが店員になりきり，保護者を客としてもてなしていた（1年）」「幼児向けの“小学校について”というブースがあり，小学校がどのようなところかを知ることができ，幼小連携に取り入れやすいと思った（2年）」。

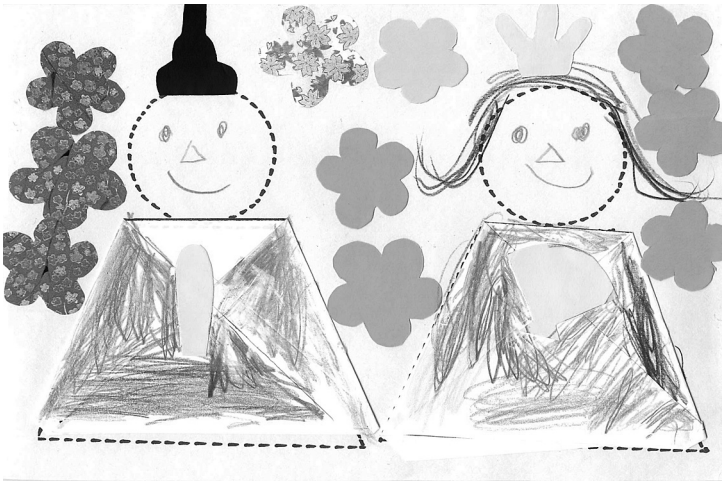
Museum of Science と Children's Museum の二か所とも教員のために教材キットを貸し出している。「教室に博物館がやってくる感覚で，チョウの標本など本物を使用する。日本でもこのようなシステムが定着すればよいと思った（1年）」。

＊高次自動化の段階の表現: activity の成功で急速に縮んだ子どもたちとの距離

観察実習を経て，徐々に子どもたちと関わる機会が増えていた時期に activity を実践できた。既に日本の BST で実施し，渡米後も改善を重ねてきた高次の自動化の段階に至る表現活動を行った。参加学生全員が，activity の後には子どもたちとの距離が急速に縮まり，コミュニケーションが活性化したと答えている。具体的な記述は以下である。

「『だるまさんが転んだ』は先生たちに助けられ，子どもたちに理解してもらえた。“初めの一歩”についての理解は難しそうだったが，紙芝居のようにだるまを紹介すると，子どもたちは楽しそうだった。日本の子どもたちは鬼になることを嫌がり捕まらないようにするが，ボストンの子どもたちは早く捕まえてほしい，鬼になりたいと言う子どもたちが多かった（1年・nursery）」「5歳児が私の拙い英語でもしっかり理解し，3歳児に説明していた（1年・nursery）」「今日の時間割に“○○○（学生の名前）'s day”と書かれていて，子どもたちが“何の日？”と尋ねたり“楽しみにしている”と話したりするので，緊張してきたが，どうにか activity を終えた。担任の先生が助けてくれ，子どもたちは色々質問し，“The small happy thing”のワークシートに“絵を描くこと”“本を読むこと”など子どもたちなりの小さな幸せを記入していた（2年・elementary school）」。

「子どもたちは寿司の存在は知っていたが，ネタの種類や名前はあまり知らないようで，ネタのクイズショーは少し難しそうだった。寿司プレートを作る活動はとても楽しんでいて，自分の分だけなく家族の分まで作ったり，私の分まで作ってプレゼントしてくれたりした（1年・preschool)」「相撲の写真や金太郎と熊の力士人形を見せたら，子どもたちが大いに反応した。紙相撲の実演をしているときは注目していた。力士人形も集中して描いていた。トントントンと土俵を叩きながら遊び方を教えると，子どもたちがマネをして紙相撲をし始めた。力士人形を使って自分で遊び出す子どももいた。(1年・nursery)」「担任の先生が少人数のグループに分けて，活動時間を1時間くださったので，子どもたち一人ひとりに“雛人形”を丁寧に教えることができた。子どもたちは思い思いに着物に色を塗ったり，顔を書いたりして，個性溢れる作品ができあがっていた（資料3参照)。BSTの子どもたちと異なり，雛人形を初めて見る子どもたちだったので，興味津津に活動していた（1年・preschool)」。



資料3: Activity「雛人形」(Bostonのpreschoolの子ども作品例)

＊校外学習（b): Epiphany Schoolを通して米国の持つ多様性の理解

Epiphany School（経済的・家庭的に問題を抱えた子どもたちが通う小学校）を訪問した。貧困層のAfrican-Americanが多く居住する地域にその学校があると聞いていたので，当初参加学生の多くは恐怖感を抱いていた。しかし，この学校に入る子どもたちの環境やそこでの教育について講義を受け，実際に子どもたちと折り紙などの活動を共にした結果，学生たちの先入観が次のように変化した。「正直子どもたちは無反応かと心配していたが，実際に行ってみると，私たちを笑顔で出迎え，一所懸命折り紙で遊んでいて，自分が固定観念に囚われていたと感じた（1年)」「(実習先の）学校とは異なり，Epiphany Schoolは夜食まである。同じボストンでも様々な学校の存在を知った（2年)」「この子たちに色々な体験をさせてあげたい。今回見た“現実”を忘れずに色々考えたい（1年)」「子どもたちは，問題が多い危険地域で生まれ育ったと思わせない明るさと人懐こさだった。学校が身体的だけではなく精神的に子どもたちの安全なシェルターになっていると思った（2年)」。

（3） 総合考察と今後の課題

上記の結果から，本年度の参加学生の学びの質的変化を考察し，その成果を元に今後の課題を検討する。

①総合考察

＊事前研修で培った「伝える」から「教える」レディネスの開発

5か月間の事前研修を終え，参加学生の記述に明確な変化が見られた。前半は英語の未熟さやボストンでの研修という未知の世界について漠然とした不安を綴る学生が多かったが，self-introductionで自分を曝け出し子どもたちに真正面からぶつかり，「英語が完璧でなくても気持ちは伝わる」実体験をしたことが，次へのステップ activity につながった。達成動機はますます高まり，activity では活動の流れや説明，内容の充実まで様々に試行できた。activity を一緒に行うことが共有体験となり，子どもたちが受け止めてくれたという手ごたえがあり，子どもたちと触れ合う楽しさを味わえた。

＊事前研修にて先行オーガナイザーを形成し，本研修の成果を促進

本年度の事前研修では，参加学生は，日本語から英語へ，自己紹介から活動へ，段階的表現方法を会得し，スキーマを確立した。本研修では，学生が自己紹介や活動に関して，既に持っている知識と照合し，理解し，取り入れる能動的過程が見られた。これは事前研修で得た先行オーガナイザーが，本研修前に形成されていた結果と推察する（鹿毛，1997）。

＊本研修による体験の「意味」化

“エピソード記述は，体験の「意味」へと向かい，新たな問いを立ち上げ，他者と「意味」を共有することに向かう”（鯨岡，2007，p 11）ように，今回の portfolio に寄せられた記述から，参加学生の体験に「意味」があったことが示唆された。それは，事前研修に続き portfolio で自分たちの本研修の体験を文章で綴る過程で表出していた。

まず，本研修の体験が，異国の地で学生たちに「今までの自分」と「あるがままの自分」を気づかせた。「日本にいた時は，自分が今まで大学で学べることは幸福であると考えたこともなかったが，ボストンに来て色々な境遇の子どもたちと関わり，今置かれている自分の状況を見つめ直すことができて，本当によかった（1年）」「研修最後の日，子どもたちがだきついてきた。私の英語が拙くてもどかしい思いも多くした。しかし，私が伝えたいという強い思いは，子どもたちにちゃんと届いていたのだとわかった（1年）」。単なる観光的異文化接触ではなく，observation や activity が学生たちの行動的事実となり，文化的アイデンティティを知る契機になった。

続いて，本研修の体験から学生たちは「これからの自分」の方向性を見出そうとしている。それは将来の「教師としての自分」や「教育観」につながっていくものである。「日本と米国の教育の違いを実際に知ることができた（1年）」「日本と米国では，教師と子どもの距離感が異なる。日本は師弟の立場を取り，米国は対等な立場を取ると思われる（2年）」「米国は教師と子どもの心理的距離が近く，子どもは教師を信頼している。授業は子ども主体で，教師はサポーター的存在だと感じた。一方，日本では，教師は尊敬される存在で，確固たる「教師像」がある（2年）」。参加学生の意見は感覚的ではあるが，東（1994）も，日米の「教育観」の相違点を次のように指摘している。米国では，子どもたちが自ら選択し専念する「自主的選好性」が見られる。教師は，子どもの興味関心を育成する態度，自立性や自己決定を支援する態度が求められる。一方，日本では，与えられた課題を黙々と勤勉にこなす「受容的勤勉性」が見られる。教師は，課題の面白さ云々より与えられた役割をこなし継続的な努力を支援する態度が求められる。参加学生は自らの体験から日米の「教育観」の差異を学んだが，今後どのように自分の「教育観」を育んでいくのか，ここからが日本においても国際化が進む教育の現場で生きる「教師としての自分」の出発点になろう。

＊春季ボストン教育研修は，参加学生にとってライフイベント，他の学生にも波及効果

全体的として春季ボストン教育研修は，参加学生にとって忘れ難い経験になったことは間違いない。換言すれば，この体験は，新奇性や示唆性の高い life event であったと言える。それだけに，参加学生の体験をオープンキャンパスや秋桜祭（昭和女子大学の大学祭）などで公開することによる波及が総合的成果として期待される。他の初等教育学科の学生たちにも春季ボストン教育研修の体験の「意味」を共有する機会になりえるだろう。春季ボストン教育研修自体が体験目標であるので，長期的な視点で達成体験を通した学びの蓄積は，参加学生から初等教育学科の学生たちへ伝達されていく可能性がある。なぜなら，参加学生たちが春季ボストン教育研修を通して，様々な人々と出会いコミュニケートし，社会的自己効力感を高めていった体験が存在するからである。

②今後の課題　～日本とボストンの連携強化カリキュラム～

前年度に今後の課題として提起した「参加学生の英語レベルの個人差に配慮する研修内容」に関しては，学生の記述にあるように達成に近づいたと考える。本年度の参加学生は，英検 3 級から 2 級までと英語のレベルには幅があったが，事前研修では，初等教育学科の学生として学ぶ内容と個々の学生として発展する内容に対応し指導した。研修が進むにつれ，鹿毛（1995）が指摘した状況と同様に，学習特性が類似した学生たちがグループを編成し，等質編成が実現し，各自の活動を支えるに到った。これは，前期の募集開始による後期の事前研修の時間確保と 7 人の参加人数だからこそ実現できた結果であろう。

今後の課題としては，学年や選択コース（幼児教育・児童教育）により適応した研修，学生の今後に役立つ実践的内容に深化することが求められる。例えば，2 年生や 3 年生には卒業論文のデータ収集の一環として，または就職の可能性を模索する手段として，学生に明確な目的意識を持たせ，参加を促進させる方略も考えられる。それには日本の事前研修とボストンの本研修の連携を更に強化し，一貫性を持つカリキュラムの開発が求められる。

（文責: 駒谷真美）

文献

東洋（1994）『シリーズ　人間の発達 12　日本人のしつけと教育　発達の日米比較にもとづいて』東京: 東京大学出版会.

鹿毛雅治（1995）「学習意欲再考」（東洋（編）『現代のエスプリ　意欲　やる気といきがい』東京: 至文堂）pp. 105-113.

鹿毛雅治（1997）『学ぶこと・教えること―学校教育の心理学』東京: 金子書房.

鯨岡峻（2007）『エピソード記述入門　実践と質的研究のために』東京: 東京大学出版会.

（このま　えいこ　　初等教育学科）
（まつもと　じゅん　　初等教育学科）
（こまや　まみ　　初等教育学科）
（その　ひろあき　　初等教育学科）
（おしたに　よしお　　初等教育学科）